

(1) 旧人から新人へ 2018年4月7日刊行

我々、現生人類は生物学的にはホモ・サピエンス（新人）とよばれ、その直接の祖先は約30万～20万年前のアフリカ大陸で誕生したと言われている。その後、十数万年をかけてユーラシア各地へと新人は拡散し、移動の先々で新人は先住者である旧人と出会うことになる。例えば、ヨーロッパでよく知られている旧人はネアンデルタール人である。その後、旧人は絶滅し新人が人口を増加させたのだが、その過程は一様でない。

ヨーロッパや西アジアの大部分では、旧人から新人への移行期に石器などの物質文化も大きく変わり、交替劇というイメージに近い。一方で、中央アジアから東南アジアでは交替では片付けられない現象が知られてきた。旧人と新人とが交替した後も、石器は交替前のものがしばらく使い続けられ、その後、新人の石器文化に変わっていったのである。

この時期のアジアはパレオアジアとよばれ、なぜ、新人はたずさえてきた石器文化を中断し、先住者たる旧人の石器文化をとりいれたのか、そして、後になって再び新人的な石器文化を採用したのはなぜかといった問題に関心が集まっている。

「人間とは何か」という根源の問題を考える上で、多様な自然環境の下、豊かな民族文化が育まれてきた東ユーラシアは、絶好の知的フィールドワークの舞台と言えるだろう。



新人の特徴的な石器であるルヴァロワ尖頭器（左）と小石刃製尖頭器＝ヨルダンのトール・アエイド遺跡で、門脇誠二氏撮影

(2) 石器文化の境界線 2018年4月14日刊行

現生人類や旧人よりも前の時代にもユーラシアに広く拡散していた人類集団がある。原人である。北京原人やジャワ原人という名前を聞いたことがある人は少なくないであろう。原人のつくる石器は旧人や新人のものとは異なっていた。さらに、原人の石器文化の性格を分ける線がユーラシアを貫いていることが古くから指摘されてきた。ヨーロッパ北部から黒海の北側、カスピ海を横切り、ヒマラヤ山脈の南側を沿いながら、アッサムまで達する「モビウス・ライン」とよばれるものだ。この線を境に、ハンドアックスとよばれる木の葉型の石斧の見つかり方に差があり、使用する石器のタイプの境界を巡る議論が重ねられてきた。

境界の解釈の一つに竹仮説とよばれるものがある。竹を素材にした利器を使用する文化が東南アジアにあったというものである。竹は植物なので古い遺跡では見つからないが、現代の東南アジアや東アジアにおいて竹製の道具が広く普及していたり、竹の中にいる昆虫を食べる食文化の存在は、竹が東ユーラシアの生活文化に深く根ざしてきたことを示している。

今では各地で発掘が進み、新たな発見も得られ、モビウス・ラインはそのままだ受け入れられてはいないが、異なる環境に適応した新人文化を探究する手がかりになりそうである。



特別展「太陽の塔からみんぱくへ」で展示中のタイの楽器「ケーン」。竹は幅広い用途がある = 筆者撮影

(3) 運搬具と人類の移動 2018年4月21日刊行

誕生の地アフリカから数十万年をへてアメリカ大陸の南端までたどり着いた大旅行から、狩猟や採集に赴き居住地へ食料を持ち帰る小旅行にいたるまで、新人は移動にあけてきた。身体一つの気ままな旅もあれば、存亡をかけた集団単位の移住もあっただろう。そして、何をたずさえて移動したのかは、文化伝播に直接関わる行動となる。

移動に際して、人間は実にさまざまなものを運搬具として使用してきた。人間が両手で持てるものは限られ、何をどれだけ運ぶかは運搬具の使用にゆだねられる。

台車や船のような移動装置は別として、運搬具として身近なのは植物繊維を素材とする袋や籠である。一方、動物の皮や腱を利用した運搬具を作る民族も少なくない。

動物の皮はなめさないで乾燥した時に硬化するが、適度な水分を与えてやると柔らかさが戻る性質を利用してさまざまな形への加工が可能である。幾重にも皮を重ねて形づくった容器は強度を備えつつ軽い。水や食料をたずさえて、乾燥した地域を長距離移動するのに適した道具である。

また、植物資源の安定した獲得が期待できない寒冷な環境下では、食料としてだけでなく、容器といった日用品に動物資源が用いられ、人類の拡散に一役買ったに違いない。



国立民族学博物館の特別展「太陽の塔からみんなくへ」で展示しているパシュトゥーンの皮製容器 = 筆者撮影

(4) 魂と通じる道具 2018年4月28日刊行

ネアンデルタール人が死者を埋葬したことは考古学者の間でもほぼ意見の一致を見ている。ほぼ同じ時期に死んだ動物骨とくらべて化石人骨のかく乱が少ない遺跡の存在がその根拠とされている。

一方で、信仰の存在までには議論が及ばない。これは、埋葬は他者の死に対するものであり、埋葬する側が、自己の死を意識しているか否かは、埋葬だけでは判断できないからである。その意味において、信仰の有無は旧人と新人とを区別する一つの要素なのかもしれない。

信仰を生み出す要因の一つは、死ぬとどうなるのかという不安な疑問だろう。「自分たちはなにもので、どこからきて、どこにむかうのか」という問いの三つ目に答えるための思考は、個体の生物としての死に関わらず、魂は存在するという想像力を人間に持たせることになる。そして、魂は人間だけではなく、森羅万象に宿るというアニミズムという考え方にもつながっていく。

目にみえない魂の存在を表現し確認するために、人間はいろいろな手立てを講じていく。神話を語り継いだり、魂と自分たちとが通じ合ったりするための道具として仮面や神像を作る。神秘的でもあり身近でもある仮面と神像は人間性の核心を表しているのかもしれない。



特別展「太陽の塔からみんなくへ」展示資料より、ニューギニアのヤムイモにつけられる仮面＝筆者撮影